

明治期沿岸要塞から得られる眺望景観の基礎的研究

熊本大学 工学部 正員 星野裕司 熊本大学 工学部 正員 小林一郎
熊本大学 工学部 学生員 萩原健志

1. はじめに

景観設計の成果には、それを行う環境をどのように読み解いたかということが大きく関与している。一般に景観とは、ある固定的な視点から対象を眺める場合を基本と考え、視点、視点場、主対象、対象場の構成要素間の空間的關係として捉えられる¹⁾。眺望景観において、そのほとんどは主対象がどのように見えるかという観点から考察されており、眺望の大半を占める対象場に着目した研究は数少ない²⁾。

一方ある地域の戦術的価値を高めるために行われる軍事要塞建設は、目的を達成するために最良の地が選択されると同時に、その主対象は仮想的な軍事行動であり、眺望景観は対象場として限定的にたちあられる。しかし、瀬戸内海における広島湾要塞や芸予要塞などの近代要塞跡は海峡を眺めるのに格好の場所であり、現在では風景を創出する装置としてすぐれた展望地になっている³⁾。

当時の軍事土木技術者の景観認識手法を明らかにすることで、現在の環境整備に活用できる、対象場に着目した新たな眺望景観の捉え方ができるのではないかと考える。

2. 研究対象

要塞とは、多数の砲台が広い要地に集散し、その地域を軍事集団的に強化したものである。なかでも沿岸要塞は、領海、内海、内湾への敵軍の侵入を防止するもので、主に海国防御における防御艦隊を支援するためのものである。

本研究の主目的は、眺望景観の把握である。そこで、以下の理由により明治時代の要塞に限定する。

航空機が登場する以前である。主に目視によって敵艦隊を捉えている。火砲の射程が7～10kmという視距離における遠景域に達している。

さらに明治時代の要塞は、国外からの攻撃、侵略

に対する防備のためのものであるため、本稿では湾口や海峡に築かれた沿岸要塞を対象とする。

研究対象となる沿岸要塞は以下の10ヶ所である。

長崎要塞、佐世保要塞、対馬要塞、下関要塞、広島要塞、芸予要塞、由良要塞、舞鶴要塞、東京湾要塞、函館要塞。

3. 研究の方法

研究方法は以下の通りである。

(1) 文献調査⁴⁾

(2) 地形図を用いた調査

(国土地理院刊行5万分の1地形図)

(3) 現地調査(下関要塞、佐世保要塞、長崎要塞)

(4) 3DCGを用いた調査⁵⁾

4. 要塞の立地と眺望景観の分類

(1) 要塞の立地による型の分類

沿岸要塞は、その目的によって海峡と港湾に立地されたものの2つに分けられる。そしてその防御対象と火砲の射程範囲の重なり方によって、防御対象のほぼ全体が覆われているものと、防御対象の一部しか覆われていないものに分けられる。これより、全国の明治期の沿岸要塞を以下のように分類した。

【海峡擁護型】

海峡の防御が主目的で、火砲の射程範囲が、海峡全体を包み込むように展開している(下関要塞、東京湾要塞、由良要塞)。

【港湾擁護型】

港湾の防御が主目的で、火砲の射程範囲が、港湾全体を包み込むように展開している(佐世保要塞、長崎要塞、舞鶴要塞、広島湾要塞、芸予要塞)。

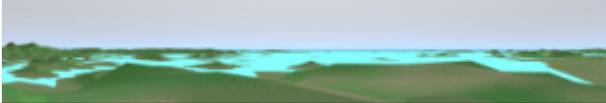
【海峡要所防御型】

海峡の防御が主目的で、海峡の要所を攻撃できるように砲台が配置されている(対馬要塞、函館要塞)。

キーワード：眺望景観、対象場、ウォーターフロント、明治、沿岸要塞

連絡先：〒860-8555 熊本市黒髪 2-39-1 熊本大学工学部環境システム工学科 tel 096-342-3602

表 - 1 眺望景観のパターン

	【奥行き】	【広がり】
【面】	 	 
【線】	 	 

(2) 砲台からの眺望景観の型による分類

3DCG を用いて、今回現地調査を行った砲台場所から得られる眺望景観を、その見え方により分類を行った。

本研究で得られた眺望景観(24ヶ所)のうち、ほとんど海面の確認できないものを除いた18ヶ所に対して分析を行った。砲台場所から眺望される海面は、その幾何学的形状によって【面】または【線】に分けられる。また、その海面の方向性によって、海面が視線方向に対して平行に広がりを見せる【奥行き】、海面が視線方向に対して直角な方向への広がりを見せる【広がり】に分けられる。これらの結びつきによって、表-1のように4つのパターンに分類した。

4.3 考察

今回現地調査を行った下関要塞について、立地の型と景の関係について考察を行う。

前述の分類において下関要塞は海峡擁護型にあたる。海峡を防御して敵艦船の内海への進入を防ぐために建設されたものである(図-1)。下関要塞において、戦略的に重要な位置を占める砲台から得られる景観は、どれも【奥行き】を持つ景観である。このことから、下関要塞のような海峡の防御が目的の場合、【奥行き】の卓越した景観が大切であるといえる。また、この【奥行き】を持つ景観が得られる砲台のうち、笹尾山砲台、竜司山堡壘を除く全てが、現在公園として活用されている。

5. 終わりに

本研究の今後の展開として、まず全国の沿岸要塞を対象として現地調査を実施し、沿岸要塞から得



図 - 1 下関要塞

られる眺望景観に関するより深い考察を行うことが上げられる。そして、それぞれの景観の型について、その軍事的な位置付け、解釈に関して調べたい。また、砲台場所から得られる眺望景観において、眺望地点からの動きのある対象物の見え方についても考える必要がある。

<参考文献>

- 1) 篠原修編、景観デザイン研究会：景観用語辞典、彰国社、1998
- 2) 参考研究として 嘉名光市、斉藤潮：主要眺望点における琵琶湖の形状に関する研究、第34回日本都市計画学会学術研究論文集、1999、pp445～450
- 3) 西田正憲：瀬戸内海の発見、中公新書、1999、pp13
- 4) 浄法寺阿朝美：日本築城史～近代の沿岸築城と要塞、原書房、1971
- 5) 『カシミール』3D風景CGのページ、URL <http://www.kt.rim.or.jp/~sugi/>